

リンダ・グラットン著 池村千秋訳

『WORK SHIFT ワーク・シフト 孤独と貧困から自由になる働き方の未来図 〈2025〉』

プレジデント社 (2012年)

いま私たちの社会は、大きな変化を経験している。一八世紀後半から一九世紀前半にかけて世界の一部の国が工業化への歩みを始めた産業革命のとき以来の変化だ。産業革命は、工業化による産業の変化や労働者階級の成立といった社会構造の変化をもたらした。いまの新しい変化は、仕事のあり方——いつ、どこで、なにを、どのようにおこなうか——を産業革命以上に変えていくだろう。私たちの働き方はどのようになっているだろうか。

何が働き方の未来を変えるのだろうか。著者が注目する変化は、テクノロジーの進化、グローバル化の進展、人口構成の変化と長寿命化、社会の変化、エネルギー・環境問題の深刻化（「第1部 なにが働き方の未来を変えるのか？」）という五つの要因だ。これらによって働き方の未来を予測している。特に人口構成の変化と長寿命化がもたらすのは、各世代の志向性に基づく働き方の相違だ。各世代の志向性は、働き方をこれまで以上に変化させるだろう。そしてどの要因においても、人と人の関わり方が、働き方を変化させていくことを示唆している。

さらに、変化が与える影響はただちに波及する。産業革命のときとは比べものにならない。著者は「いま途方もなく大きな規模創造的・革新的変化のプロセスが本格的に始まろうとしていること。そして、その大転換の結果、世界中の人々の毎日が根本から変わるということだ。」と指摘する。本書は、「暗い現実」と「明るい日々」の二つのストーリーで人々がどのように働いているか、そして、変化の中で個人は何をシフトすべきか、を論じている。

まず、「第2部 漫然と迎える未来の暗い現実」では、いつも時間に追われ続ける未来、孤独にさいなまれる未来、繁栄から締め出される未来といった働き方を予測している。「暗い現実」のストーリーは、私たちの働き方の未来を形づくる五つの要因がマイナスの方向に作用した場合に導き出されるものだ。特にテクノロジーの進化は、利便性だけでなくより一層の孤独を与えることを示唆している。しかも、貧困は国や人種を越えて起こってくる。孤独になることで貧困を迎える。筆者は、迎えた貧困でさらなる孤独を味わうというサイクルが生まれると考える。どこかで歯止めをかける必要性が出てくるのだ。

次に、「第3部 主体的に築く未来の明るい日々」では、コ・クリエーションの未来、積極的に社会と関わる未来、ミニ企業家が活躍する未来といった働き方を予測している。「明るい日々」のストーリーは、テクノロジーの進化とグローバル化の進展、長寿命化により、人と人が結びついて仕事をしている働き方を示す。みんなの力で社会の問題や組織の課題を解決するようになっているだろう。シフトを理解し、実践している人々の結果だ。「明るい日々」の価値を示唆しているともいえる。筆者は、人と人との結びつきこそが孤独と貧困から自由になる術だと感じてならない。

まとめとして、著者は三つのシフトについて論じている（第4部 働き方を〈シフト〉する）。第一は、ゼネラリスト思考のキャリアが通用しないことに対応するために専門分野を年齢とともに連続的に築いていくこと。第二は、人間関係や人的ネットワークを形成するには意識的にする必要があること。第三は、やりがいと情熱を感じられ、前向きで充実した経験を味わえる職業生活への転換を成し遂げ、所得と消費を中核に据える職業人生から脱却することとしている。人に求められる価値観を示しているといえよう。

適切な選択であったかそうでないかは後にわかることだ。しかし、選択の時までに何もしていないのであれば結果はみえている。選択はいついかなる時やって来るかわからない。常に何かに挑戦し、行動していることが大切になる。「孤独で貧困な人生」と「自由で創造的な人生」のどちらに在るかは自分次第だろう。（山崎 雅夫）